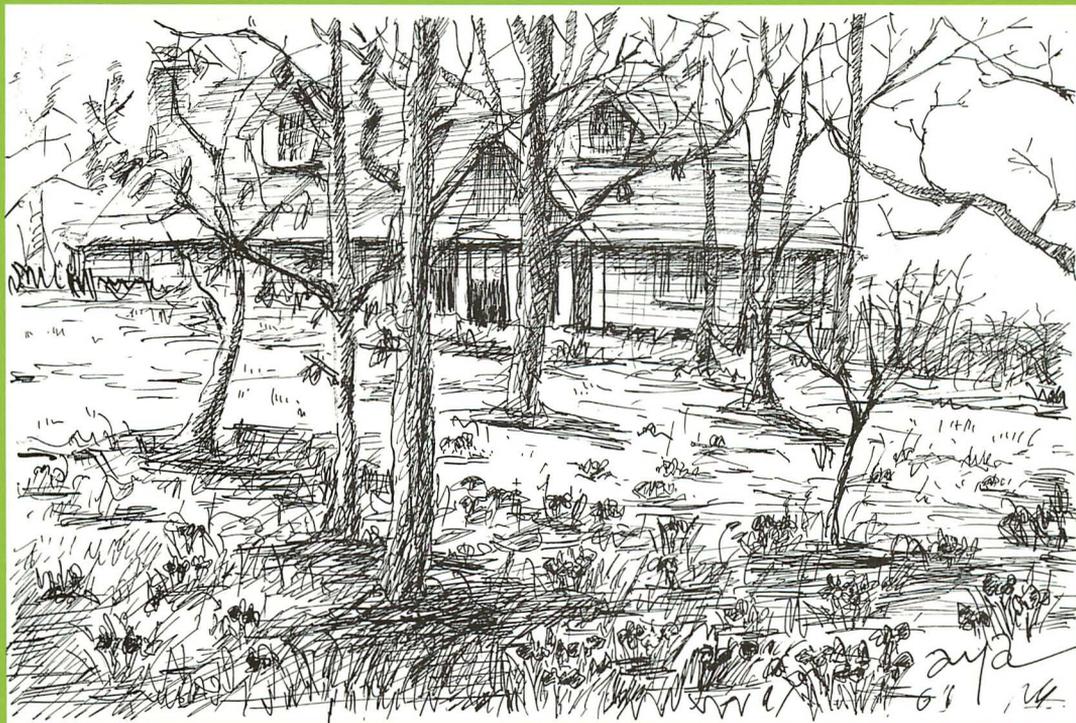


まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL.64



大分県 九住高原

特「原点からのスタート」集

—まず自分たちができることから—

- 地域文化が問われる時代
- 子供達と夢を見ていたくて
- 一番にこだわって汗と知恵で勝負
- 私と「森は海の恋人」との出会い
- 広がるお手玉の輪・笑顔の輪

■ 論談—まちづくり—

熊本大学教授

徳野 貞雄

■ キラリ光るまち

京都府 大江町

大槻 博路

好評連載

★ 歩キ目デス&足ラテス

岡崎 直司

アングル

地方分権時代の新センター ……(働えひめ地域政策研究センター 専務理事・所長／三木 秀文 …… 1

特集

『原点からのスタート』

—まず自分たちができることから—

- 地域文化が問われる時代 …… 伊予市／門田 真一 …… 2
- 子供達と夢を見ていたくて …… 河辺村／角藤 福美 …… 4
- 一番にこだわって汗と知恵で勝負 …… 三瓶町／宇都宮長男 …… 6
- 私と「森は海の恋人」との出会い …… 双海町／富岡喜久子 …… 8
- 広がるお手玉の輪・笑顔の輪 …… 新居浜市／武田 信之 …… 10

論談—まちづくり—

- 人口減少時代の農山漁村の定住対策
—人口増加型のパラダイムからの脱却— …… 熊本大学教授／徳野 貞雄 …… 12

キラリ光るまち

- 一人一人が大切にされ、長生きしてよかったまちづくりを目指して— …… 京都府大江町／大槻 博路 …… 14

リレーでちょっとトーク

- 無言の教え …… 宇和島市／楠葉 拓史 …… 16
- 自分と向き合う場所 …… 久万町／中田 紀子 …… 17

風おこしのちかい

- まちづくりの新しい風をおこそう …… 双海町／若松 進一 …… 18

わがまちトピックス

- 歌麿の版木と復刻した浮世絵を起爆剤とした町おこし …… 肱川町／二葉 廣和 …… 20

媛のくにフラッシュ〈弓削町・中島町〉 …… 23

MY TOWN うおっちんぐ 「歩キ目デス&足ラテス」

- レクイエム “銭湯” 「保内町 清水湯」 …… 岡崎 直司 …… 24

研究員卒業レポート

- 研究員活動を振り返って …… 小川 龍児 …… 26
- スタート地点へ戻って …… 檜垣 明宏 …… 27
- 明るく生き生きとした地域を目指して …… 沖田 敏広 …… 28

読者の声・こえ・声・Information …… 29

特集「原点からのスタート」
今号のテーマ

まず自分たちができることから
二〇〇〇年代がスタートしました。

「まちセン」も(働えひめ地域政策研究センター)まちづくり活動部門として再出発です。

地方分権一括法も施行されて、これからは、自分たちの地域のことを自分たちで考え行動し、それに対して責任を負う時代になりました。

自分たちの地域をよくしていこうと思えば、まず自らが動かなければ、何事も始まらないと思います。それが「まちづくり」の原点ではないでしょうか。

そして、それは自分たちでできることから始めたので、いいのではないのでしょうか。今号では、そのような形で住民が主体的にまちづくりに取り組んでいるケースを特集してみました。

(編集子 ff)

表紙の言葉

エヒメアヤマ。愛媛県が北限で高縄山に自生地があるが、地元の人ランティアで守られる程度。

春に九州へ花見旅。毎年、このエヒメアヤマに偶然出会うのが何より嬉しい。久住高原のど真ん中。八千坪の広大な敷地。クヌギ林の中にエヒメアヤマの群生が続く景色に、目を疑う。足の踏み場もないと表現したい草むら。

愛媛で見られないこの風景が大変羨ましい。ここがエヒメアヤマの美しく咲ける場所なのかと、離れがたい。

柳原 あや子



(財)えひめ地域
政策研究センター

専務理事・所長
三木 秀文



二〇〇〇年四月一日、これまでであった(財)愛媛県まちづくり総合センターと愛媛県社会経済研究財団を発展的に統合する形で、新しく(財)えひめ地域政策研究センターが発足いたしました。

同じ四月一日、国と地方との関係を、「上下・主従」から「対等・協力」の関係に変えることを目指して、地方分権一括法が施行され、国の関与が大幅に緩和されることになり

ました。

これからは何事も中央にお伺いを立てるのではなく、地方自治体が自らの判断と責任で政策を打ち出せる自治の範囲が広がり、地方分権は新たな段階を迎えたと言えましよう。

ただ、今までの全国一律・横並びのぬるま湯の世界から、それぞれが政策を競う時代になって参りますと、政策立案能力の差が大きな地域差となつて現われることとなります。

ところで、愛媛県を取り巻く状況は、瀬戸内三橋、Xハイウェイの開通など、交流基盤の整備が進む一方で、少子高齢化、生活圏の広域化、IT革命の進展、産業構造の変化など、社会経済情勢の大変革期に直面しております。

二十一世紀は、「知恵の時代」だと言われておりますが、これらの課題を解決しながら、地域間競争に勝ち残っていくためには、県民の英知を結集したシンクタンクが必要であ

ると思います。これは、新財団の理事長に就任された加戸守行知事の選挙公約でもあり、期待の大きさをひしひしと感じているところです。

一方、地方分権の担い手である住民の側に目を向けて見ますと、これからは住民が行政に何かを期待するのではなく、住民が住みやすい地域づくりのために何ができるのかが問われていると思います。

従来の行政主導の後からついていくというスタイルから、住民が政策決定のプロセス段階から積極的に参画し、住民と行政がお互い対等なパートナーとして「協働」していくことが求められています。

さらに、特定非営利活動促進法(NPO法)の成立に伴い、「市民」自らが公益的サービスの手となる時代がやってきています。

既に県内各地では、住民の主體的な地域づくり活動が活発に行われ、これまでのまち

づくり総合センターでも情報の提供や活動のサポートなどを行つて参りました。

これらの事業については、「舞たうん」の発行をはじめ、新財団のまちづくり活動部門にそのまま引き継がれ、財政基盤、スタッフの強化等により、より機能の充実に努めたいと考えております。

今年度は、スタッフも一新されたこともあり、もう一度原点に戻つて、県内各地の活動者の訪ね歩きから始めて、センターとして何をお手伝いできるかを再考してみたいと考えています。

サポートセンターであるまちづくり活動部門とシンクタンクである企画研究部門が、それぞれに力を発揮していくなかで、互いに連携し、地域現場の目線に立った政策研究、政策提言、情報提供等ができればと考えておりますので、ご愛顧、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

地域文化が問われる時代

—宮内邸を守る活動から—



門田 眞

りの中ほどに入母屋の破風をもつ本瓦の大屋根「宮内小三郎邸」があります。

灘町は江戸初期の一六三六年（寛永十三年）、お替え地によつて大洲藩の領地になったことを契機に、宮内九右衛門・清兵衛の二兄弟が藩主加藤泰興から広大な草木の土地を譲り受け、町人自らがつくりあげた町です。伊予市のはじまりは、ここにあります。

地割りの規模（奥行き六十軒）の大きさとともに、開町以来の所役御免地であり、大洲藩から格別の特権・自治が任された在郷町でした。

「町を拓いた宮内家の家が、二百六十年以上さかのぼり現在まで残っていること自体奇跡的なことだ」と、民家研究家の大伏武彦先生は語ります。また明治末期に建てられた数寄屋造りの隠居家は、大洲の臥龍院を手掛けた名棟梁中野虎夫によるものであり、木造建築物の粋を生かしたたまたまは、県下でも重要な名建

築として専門家の間では評価されてきました。

「共同学習・自治」型を めざして

この宮内小三郎邸を守ろうと、市民が「会」を立ち上げることになったのは、中心市街地の開発をめぐる様々な動きが背景にあります。空き地となった土地にマンション開発を進めようとする企業と、現行の都市計画制度上では、これに歯止めをかけられない住民との確執、中心部の「活性化」をめぐつて「人口増か景観か」の論争など、政争にまでエスカレートしてしま

た。しかし、こうした動きの傍らで、灘町・湊町の歴史的な建築物が老朽化し、砥部焼のルーツともいふべき湊町「旧和泉屋出店（西岡邸）」の取り壊しに見られるように、やむなく消失していく事態が進んでいました。

歴史的な町家を残すという

ことは、所有者の個人的な努力だけでは困難です。同時にその足元には、中心部の人口減と高齢化が急速に進み、かつての祭り・共同体を維持してきたコミュニティが崩れはじめていること、町の歴史や文化への誇りや愛着が薄れていくことなど、構造的な問題をはらんでいます。

「宮内邸を守る会」は、政治的な議論より、まず同じ町内に住み生活している住民として、町の歴史を学び、この町にしかない歴史的な文化遺産を再発見し、保存と活用について考え、自らやれることをやってみようということからスタートしました。後世に継承できるかどうかは住民の自治の力にかかっていると、「共同学習・自治」型でもいふべき新しい市民活動のスタイルを模索しています。

何よりものよりどころは、九十二才というご高齢にもかかわらず、当主十二代小三郎さんのお家に対する熱い愛着



脈々と続く町のルーツ

かつての大洲街道の入口にあたる伊予市灘町。その大通

と祖先への想いです。これを地域で支えるのが私達の役割ではないか。その意味も込めて、事務局を宮内家の菩提寺である「榮養寺」に置いています。

歴史文化の町づくりへ

「会」の結成以来一年余りですが、

① 共同学習・調査研究では、宮内邸の木造建築物の価値について、松山工業高校の犬伏武彦先生と南海放送の協力による解説パンフの作成、大洲の臥龍山荘と野村町惣川の土居家の見学会。愛媛大学内田九州男教授の研究室による灘町の歴史

と地割り調査、宮内家の古文書調査。建築士会伊予支部の協力を得た「湊町西岡邸の緊急調査」など。

② 市民向けの見学会では、「春と秋の見学会」、住



郡中まちなか路上観察会

吉祭りでのギャラリー「灘町と宮内邸」展の開催。岡崎直司さんと「郡中まちなか路上観察会」のウォッチング。

③ 保存・活用についての学習では、内子町の安川徹さんのガイドで「高橋邸」「大瀬の館」の見学、町並み保存条例の学習など。

これ以外でも俳句や日本庭園を楽しむ市民グループなど、県内外から宮内邸への見学も後を絶ちません。

こうした活動の中で、新たな成果も生まれています。共同調査の中で発見された江戸期の灘町絵図「郡中市浜辺図」が、伊予市指定文化財と

なり、保存と活用が図られることになりました。

また、九月議会では、歴史的町家の調査予算が初めて計上され、行政の前向きな姿勢が徐々に見え始めました。

地域の文化拠点として活用を

今、宮内小三郎さんの個人的なお力で、蔵の補修や古記録の整理が少しずつ進み、歴史の展示コーナー開設の検討など、保存や活用の方向もこれからが正念場を迎えます。

私達は、宮内邸を単なる見学施設にしてはならないと考えています。まちの歴史を語り続けるシンボル（記念性）として、地域の文化活動やコミュニティの発展のための共同財産・発信拠点として「生きた活用」ができないだろうか。そのための文化財登録制度の活用や体制づくり、点か



(6月中旬に地域ミニフォーラムを開催予定)

ら面への地域的展開などが今後の課題です。

グローバルゼーションの中で、今アジアでは「遺産とアイデンティティ」が唱えられ、香港やシンガポール、中国でも伝統的な街並みを復元する動きが始まっています。国際化は、同時に日本の地域文化をあらためて問う時代なのかも知れません。

特集

『原点からのスタート』

—まず自分たちができることから—



一緒に何かやってみたいね。」という話になり、幼い頃から宝塚歌劇団や劇団四季の舞台が大好きだった私は、迷うことなく、「ミュージカルをしようよ。」と言っていました。子供達の中には、歌もダンスもお芝居も全部好きという子もいるでしょう。でも、中にはそのうちのどれかが好き、あるいは裏の仕事が好きという子もいると思うのです。ミュージカルなら、多くの子供たちそれぞれが、それぞれの分野で楽しく活動できるのではなかったのです。

子供達と一緒にがきっかけ

私を取り巻く若い？お母さん達は、いつも何かやっていないと気が済まない人達ばかり。3年前の秋には、ママさんコーラスを結成し、文化祭に出場しました。これが劇団「DANDAN」の原点です。

文化祭終了後、「次は子供も



「DANDAN」という名前は、あらかじめ出ていた幾つかの名前の中から、団員全

員で決めました。「だんだん」は、この辺りの方言で「ありがとう」という意味でいつも感謝の気持ちを忘れないでいよう。そして、みんなでだんだん向上していきたいね、という願いがこめられているのです。

希望に胸を膨らませ 臨んだ初舞台

夢あふれる素敵な舞台を作りたいと希望に胸を膨らませたいと希望に胸を膨らませたいと希望に胸を膨らませたいと希望を開始したのは九八年四月下旬でした。

そんな「DANDAN」の主要メンバーが、挫折感を覚えはじめたのは夏の終わり。木枯らしが吹く頃には、しんどさもピークに達していました。公演は三月。時の流れは待つてはくれないのに、主役をはじめ脇も二役ほど決まらず曲も出来上がらない。道具は手つかずで、やはり全てオリジナルは無理なのだろうかと眠れない日が続きました。



第1回公演に向けての猛練習

そんな私達を見かねた人達が、次々に団員として加わり、役者として裏方として力を発揮してください、練習方法も変え心も新たに活動したところ、見る見る作業ははかどったのです。

そしてむかえた公演当日。「うまくできるだろうか。」「お

<p>花のごとく輝いて</p> <p>3月22日(月)</p> <p>午後6時 開場</p> <p>午後6時30分開演</p> <p>河辺村共済集務センター 1F大会議室</p> <p>共催 河辺村教育委員会</p>		<p>入場券 無料</p> <p>No.</p>
--	--	--------------------------

中学生が描いた第1回公演のチケット

客さんは、たくさん来てくださるかしら。」と、みんな緊張し、何かしら不安で落ち着きませんでした。

結果は大成功でした。

当然のことながら、中には勉強になる意見もありましたが、ほとんどの人が、「いいものを見た。」と喜んでくださったのです。

ミュージカルをしようと思った日から約一年四ヶ月。お母さん達の友人としての絆は深まり、いろんな才能のつぼみを持っている子供たちのこれからを楽しみに思い、愛しくも思い、快く協力してくださっている教師のみなさん、お父さん達、地域のみなさんへの敬愛も深まり、何でもいい、みんなで苦勞して何かを成し遂げるってすばらしいなつて、改めて思ったのです。

二作目、三作目への挑戦

あんなに懲りて、もう一度つきりと思っていたのに、昨年秋には、二作目「花のごと



第2回公演の様子

く輝いて」人権のつどい編を公表してしまいました。「二度傷ついた心は、治らないんだよ。傷つけられたからといって、くよくよしたり人を恨んだりしてはいけないんだよ。そこから幸せになんてなれないんだよ。」と、子供達へ、その子供達を育てている大人達、そして自分自身にどうしても伝えたくて書いた作品でした。

二作目はさらに好評で、こんなに喜んでくださる人や、参加できることを楽しみにしている子供達がいる限り、や

はり続けてみようかなと、今三作目に取り組んでいるところです。

まだ、作品を書いている段階で、前二作が好評だった分、かなり苦しんでいるのですが、やはり夢一杯のホッとできる作品を書こうと頑張っています。

存在感のある

ミュージカルを夢みて

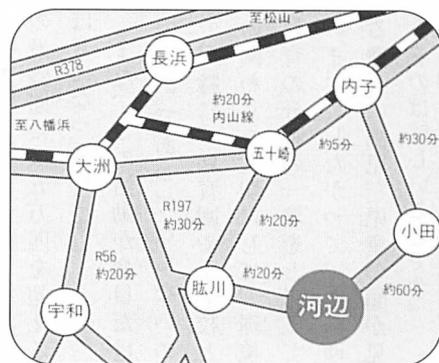
「DANDAN」が産声をあげて三年目になります。まだまだ未熟者で、少々危なっかしいのですが、いつか、村外の人達が、河辺村と聞いて「ああ、ミュージカルなどというものをしている劇団がある村ね。」と思うほど、存在感のあるものになればとおこがましいことを思っています。

今でも宝塚の舞台が大好きで、テレビで放送される舞台を楽しみにしている私は、大人になりきれないなあと思いつつ、こんな私だからこそ、子供たちと夢が見られるのだ

ろうと思うのです。

将来はこんな風になりたい、こんな仕事をしたという現実になりうる夢、おとぎ話の中のことを信じる、決してつかむことの出来ない夢、夢にも色々ありますが、夢を追いかけている子供達がいる限り、DANDANは、その子供達と共に夢を見ていることでしょう。

もちろん、影ながら応援してくださっている地域の皆様への感謝を胸に。





一番にこだわって
汗と知恵で勝負

めだか会《三瓶町》
めだかの学校・校長 宇都宮 長男

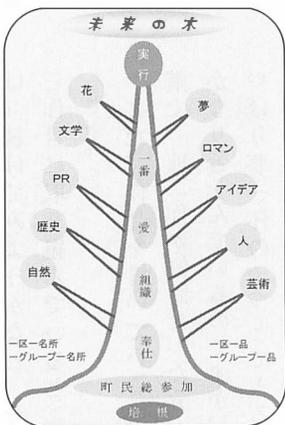


三瓶町は愛媛県の西南部に位置し、県都松山市から道程で約八十km、JR八幡浜駅からバスで三十分、豊後水道に面した半農半漁の町です。町の特産品としては、ニューサマーオレンジが有名であり、夏祭り「奥地の海カーにばる」で毎年開催される豚のロデオはユニークなものです。

めだか会の活動

我らのめだか会は、現在会員十七名のボランティアグループです。会員の構成は、会社経営から農業、漁業、商業、公務員、その他と様々です。

めだか会の基本理念「未来の木」は、一番、愛、組織、奉仕が幹となっています。



めだか会の基本理念

一番とは、一番お金を使わずに、一番早くするには、一番きれいにするには、といったことです。が、一番…と常に考える事が重要な事であり、活動していく上で大切なことと考えています。

- 以上四事業を行っています。が、これら事業を行うにはお金の問題が付きまとうのは世の常。しかし、会費(月千円)だけではどうしようもないの
- ① めだかの保護(自然環境を含めて)と飼育
 - ② カンナの花の苗づくりと定植
 - ③ 古代米の栽培
 - ④ 炭焼き

が現状です。「金がなければ汗を出せ、そして知恵を出せ」と言われるように、汗と知恵で勝負しています。

① めだかの学校

三島川沿いのウナギ養殖場の跡地(約四十町)を借り受け、「めだかの学校」をつくっています。上には東屋風の建物を建て、地域の人々の憩いの場になっています。

蔵貫地区ではめだかが絶えることなく生息していました。

この古代から続いためだかを絶やしてはならないと考え、会員の休耕田(五十町)を借り受け自然に近い状態で「保育所」をつくっていますが、夏の最盛期には五万匹を超えるほどになっています。

また、この活動が会員だけのものではあってならないので、特に、保育園や小学校との関わりを大切にして、環境教育の分野の一翼をと考えています。したがって、あらゆる機会に園児、児童の顔が見えるのは嬉しいことです。

②カンナの花づくり

カンナの花は夏に向かつて咲く花で、情熱的でたくましい花です。夏のカンカン照りにも強くて水を与えなくてもほとんど枯れることもなく、このたくましさは我らも学ぶところがあろうと思うのです。

このカンナの花をもって、三瓶町内五十kmのカンナの道づくりを目指し、会員が苗を増やし、会員の手で植え付けています。(現在の長さ二十km)

③古代米づくり

会員の水田(二十町)を使い赤米づくりをしていて、町内五つの小学校の児童の手で田植えから刈り取りまで行われています。会員はそれぞれの分野で奉仕と交流をしているのです。

④炭焼き

会員の中には炭焼き経験者が数名いて、この経験を生かし、めだか会で窯を持ち、年に数度木炭を焼いています。

この炭焼きも我々会員だけのものと考えず、より多くの

人達に体験していただくようにと考え、昨年は蔵貫、下泊両小学校の児童が竹炭を一窯焼いて、これを使って作品づくりをしました。

この炭焼きの過程で出る木酢液も、いろいろな面で活用しています。

第十四回農村アメニティ・コンクール最優秀賞

アメニティとは、「快適環境」という意味で、地域住民が主体的かつ積極的な活動を行うことにより、快適な環境が保全・形成されている農村が表彰の対象となっているものです。

今回、このコンクールに於いて、三瓶町が最優秀の栄をいただきました。これは愛媛県においては、久万町に続き二番目になります。

「歴史は一晚でできるものではない」この言葉どおり、先人がつくり育ててきた伝統文化の朝日文楽、住民の取り組みとしての生活改善グルー

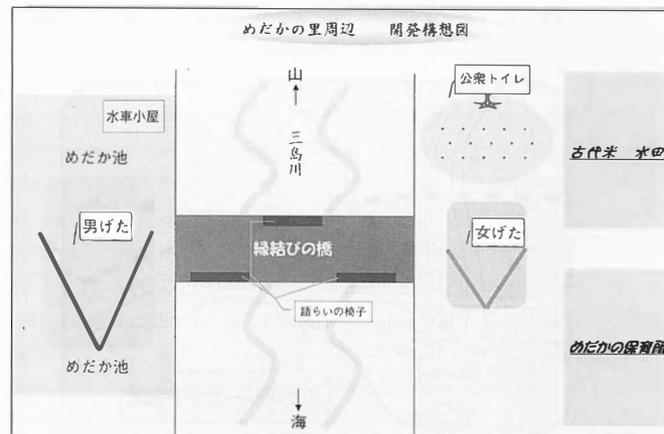
プや女性塾の活動、快適な自然環境を保全する我々のめだか会の活動。全体の調和に対する評価、居住区域の評価等々があげられますが、そこに住む住民の活動が盛んで生活の中に生かされていることが最も大切であり、このことが、審査員に高く評価されたと思うのです。めだか会の活動もこの賞の一翼を担ったことに多少の自負を持っており

今後、会員が更に結束し、汗と知恵を出し合って、キラリと光る地域づくりのために、自分達に出来ることは何かを考え実行していきたいと考えています。夢としては、三島川に「縁結びの橋」をかけた

ぜひ、一度きてみなはいや。



筆者とめだか会発起人の菅原さん、会長の三好さん



めだかの里開発構想図

私と「森は海の恋人」との出会い



富岡喜久子

〈双海町〉

④海を守る運動の推進「海の記念日による海岸清掃、クリーン作戦デーの渚の清掃」⑤魚食普及運動「魚を使った郷土料理の伝承、料理教室、水産加工品づくり」⑥他団体との交流・地域でのイベント参加、ボランティア活動に参加協力などの活動を行っております。

また、自主的な全国共通運動の推進として、森と川と海をつなぐ環境保全運動、第八次合成洗剤追放運動、石けん使用、パンフレット配布にも取り組んできました。

じゃこ天売って

ヨーロッパへ行こう！

特に、私達の漁協婦人部では、昭和六十年頃より豊漁続

きで、魚価の低迷が不安で何とか魚に付加価値をつけようと、地域の特産品づくりに取り組みことにしました。行政や事務局のご支援をいただき、愛媛県工業技術センターの岡康弘先生のご指導を受けることが出来るようになり、加工事業の取り組みが始まりました。そして、夏まつり、文化祭、愛媛産業文化まつり等に販売をすることが婦人部員の大きな励みとなりました。

高齢になっても安心して地元で働くことや、魚を加工し販売店を持ちたい。その上婦人部の活動資金が確保でき、自立をするなど、夢として話し合ったものです。

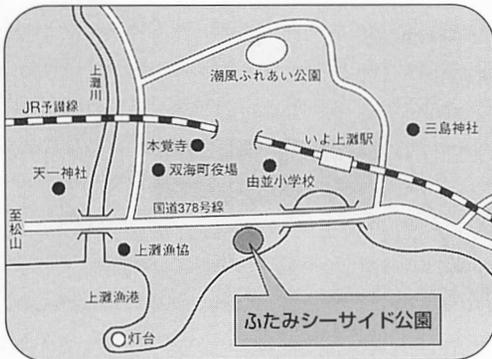
ちょうど双海町では、町おこしの風が吹き始め、いきいきと輝きを見せはじめていた頃です。

平成七年三月十六日オープンのふたみシーサイド公園内で、「じゃこ天」販売をしてみないかとの話をいただきました。婦人部としての運営、原

料の問題、毎月々売れるだろうか。お客様は？働く人は？赤字が出たら誰が？本当に試行錯誤の続く中で、見切発車だと言われながらオープンを迎えました。

準備の期間中いろいろな方のご支援をいただきながら、赤字を出さないよう、味の良い喜んでくださる「じゃこ天」を作ろうねと頑張りました。

婦人部の母さんたちも、売店に立ち、「いらっしやいませ」「ありがとうございます」「お魚百パーセントよ」「お茶



組織の強化を図りながらの活動
私達の漁協婦人部活動は、組織の強化を図りながら、①漁協事業全面利用「貯蓄推進公共料金加入」②助け合う漁村づくり「海難遺児募金一人一月十円」③計画的な暮らしの推進「家計簿及び営漁簿記載研修会」

をどうぞ」「またどうぞ」このような言葉がやつと言えるようになりました。

地域や町外、観光客の皆様を支えられお陰様で売り上げも順調で今年は五周年になります。目標は、「じゃこ天売ってヨーロッパへ行こう」です。

一つの出会いから 環境保全運動へ

次に、私達の海と森をつなぐ環境保全活動の一つとして、漁協婦人も一昨年小田深山に植樹をさせていただきました。

それにつきましては、数年前になりますが、県の漁村女性交流学習に依り、宮城県気仙沼の市場見学と桑原漁協の畠山重篤組合長さん及び婦人部の方との交流を行い、熱心に環境問題について話し合ったのがきっかけでした。

畠山組合長さんとの出会いは、東京での研修会で、「森は海の恋人」の講演をしていただき、ファンになりました。

唐桑は畠山先生の在所でもあり、牡蠣の養殖業をされていらつしやいます。

先生は、海の環境を守るには、海に注ぐ川、そして上流の森を大切にしなければならぬということ、気仙沼に注ぐ川の上流の森に毎年木を植える活動を漁協と婦人部、後継者の皆さんで続けられています。山の子供達を海に呼び、森と海の関係を学んで帰ってほしい、海の子供は山に行くという活動をもう何年も続けておられます。

双海町でも、昔から漁民は海上で山を見て船の方向や位置距離の測定、天気予報などの情報を山の姿で判断し、季節によって回遊してくる魚の通り道等を知るところを子孫に伝えるとよく聞いたものです。現在は、音波に依り魚群を知ることが出来、安全に漁港に帰れるようになりました。

環境に優しいとよく言われますが、洗剤や生活雑排水による汚染が川や海を変えてい

ます。

私達婦人部は、瀬戸内海海洋汚染シンポに参加したり、昨年六月には吉海町に於いて、琉球大学農学部教授比嘉昭夫氏ご夫妻の「EMによる地球蘇生文明づくり」の講演を聞きに行きました。その講演の後、数名の体験発表、次いで、西条、今治、松山地区の漁協婦人部の方と共に、私達の役員も参加し有意義な交流会が開かれました。

そして、婦人部でもEM菌と糖蜜を米のとぎ汁に入れ発酵液を作り、少しずつ家庭の排水口に入れ川に流すようになりました。

じゃこ天の店でも、油汚れ、魚の臭いで下水等の悪臭が強く困っておりましたが、発酵液を使用後は、だんだんと解消され、下水がきれいになっていることに驚き、全員で取り組むように輪が広がり、他の団体にも呼びかけ、川上の方たちにも協力していただけるようになりました。



夕凧焼きも始めました。

昨年十一月十三日、双海町のめだかの学校で開かれた、ミニフォーラム「めだか考」に出席しましたが、環境問題に熱心に取り組んでおられる方ばかりの中で勉強をさせていただきました。

海は借り物です。母なる海、宝の海を子供に渡すまで大切に守り育てる責任が私達にはあります。今後も地に足をしっかりとつけ、環境問題に取り組み、地域に合った活動をご協力を得ながら続けて参りたいと存じます。



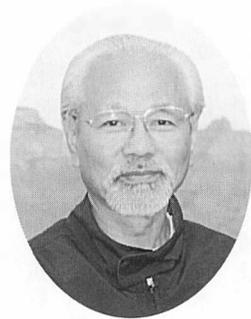
広がるお手玉の輪・笑顔の輪

お手玉の普及活動で人とまちを変える

日本のお手玉の会会長

〈新居浜市〉

武田 信之



頃から不況の波が押し寄せた。シャッターを降ろす商店が目立ち、市民は元気をなくしていた。

そんな一九八五年（昭和六十年）十月。市民の有志十人余りで、『新居浜アメニティ倶楽部』が誕生した。目的は、「自分達の手で快適なまちをつくろう」だった。

自然、文化、生活の三つの面から具体的な取り組みを始め、その中に、次代を託す子供たちに、新居浜市の歴史や文化、民話を語り、伝承遊びを伝える活動があった。

隔世伝承のお手玉遊びで

世代間交流

子供たちは、動きのあるお手玉遊びに、ことのほか関心

を示した。さっそく、お手玉について、お年寄りに尋ねたり、情報の収集を行った。

お手玉遊びは、おばあちゃんから孫への「隔世伝承」で、道具作りから始まる。「お手玉遊びの復活で、世代交流を図り、笑顔を取り戻そう」という活動に発展した。

現代は、核家族化で、祖父母との生活が激減。祖父母はさびしく暮らす。子供たちは、電子おもちゃとの一人遊びにふける。おとなは、情報化の中で、コンピュータを相手の仕事。人々は、心を持たない機械が相手の生活で、心が荒んでいける。その結果、空き缶の投げ捨てや、タバコのポイ捨てが目立つ。子供たちの不良化も心配される。

お手玉遊びには、おばあちゃんの復権、世代間交流がある。運動機能の回復、脳の活性化、老化防止にも効果がある。心の交流や温もりの伝え合いから、笑顔が広がり、豊かな心、ゆとりの回復につな

がる。

お手玉遊びは、現代社会の欠陥を補う格好の媒体と言える。メンバーは燃えた。お手玉遊びの普及を「まちおこし」の柱にすえた。

全国組織への発展と

「三点セットのドサ回り」



お手玉のキャラクター「玉ちゃん」

この活動が、一九九二年（平成四年）に、全国組織の『日本のお手玉の会』に発展した。その年、「温もりを届けた手から心へ」をスローガンに、「第一回全国お手玉遊び大会」を新居浜市で開いた。

大会は、新居浜市内の二十三日のボランティア団体で組織する実行委員会と、日本のお手玉の会の共同主催で、年一回開いている。今年八月二十七日の開催で九回目になる。

市民の手で

住みよい「まちづくり」

お手玉遊び普及活動は、自主的な市民活動から生まれた「新居浜発！全国行き・世界行き」の取り組み。

新居浜市は、別子銅山開坑以来三〇〇年の歴史を持つまち。その工都に、一九八〇年

参加者は年々増加し、昨年九月の大会には、二十五都道府県とソウル、サンディエゴから約八百人にのぼった。五歳から九十歳までの選手が、お手玉の技を笑顔で披露。交流を深めた。観客は八千人を数えた。

障害を持つ人のための、お手玉遊園地も設けた。技量認定審査や、折り紙、皿回し、竹とんぼなどの遊びコーナー、物産展も人気を博した。

現在、日本のお手玉の会の会員は四十四都道府県に千人。支部は、国内に十一。海外に



アメリカでもお手玉遊びは大変な人気

はホノルル、サンディエゴの二つがある。

日常活動は、世界と日本のお手玉展示、作り方教室、遊び方教室の三つ。これを「三点セットのドサ回り」と呼び、国内は週三回の頻度で出かけ、海外にも遠征する。海外は、ハワイに四回、ロサンゼルスに二回、サンディエゴに一回の計七回出かけた。

世界に広がれ

「お手玉の輪・笑顔の輪」

最近の話題は、お手玉関連商品に人気が出てきたこと。写真絵本『お手玉』（文溪堂）は順調に伸びている。海外旅行のお土産、結婚披露宴のプレゼント、卒業記念、商店の開店祝い、教材、福祉施設などで、広く利用されている。お手玉のキャラクター「玉ちゃん」を描いたTシャツや袋物などの人気は上々。さらに、せんべい、お酒をはじめ市内の各業種で、商品の開発が進められている。



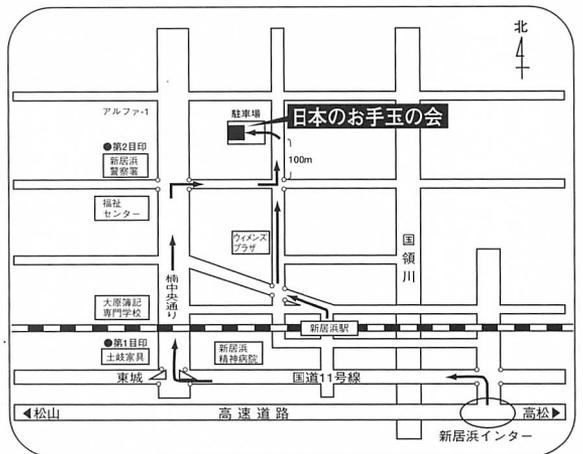
写真絵本『お手玉』（文溪堂）

また、テニスの女王ヒンギス選手への、お手玉三段の認定証の贈呈、往年の「青い山脈」のヒロインで、ロス在住の杉葉子さんの顧問就任などの話題がある。

問題は、活動資金。これまでは、理解ある企業から、事務所の提供、事務局員の採用、大会への協賛などがあり、そのほか、市内の企業、団体、市民の皆様の援助で、全国大会を開催してきた。

さらに、増加する日常活動、海外遠征などへの、会員の献身的なボランティア参加が、大きな力になっている。

これからは、大幅な会員の拡大による会費の増収、事業の増大などによる、活動資金の確保が課題。



このお手玉遊びの普及活動が認められ、さる一月十四日、「地域づくり団体自治大臣表彰」を受賞した。これは、愛媛県や新居浜市内の企業、団体、市民のみなさん、全国のお手玉ファンの協力、支援、努力が評価を得たもので、心から感謝している。

これを契機に、手から心へ温もりを届ける「お手玉の輪・笑顔の輪」を、国内はもとより、世界に向けて、さらに力強く発信していきたい。

人口減少時代の農山漁村の定住対策 —人口増加型のパラダイムからの脱却—

熊本大学文学部 教授 徳野 貞雄



三十〜四十年、全国各地の農山村で地域活性化事業や「村おこし」活動が展開されてきました。膨大な補助金も投入されてきました。

しかし、そのほとんどの試みが成功したとは言えません。人口を増やそうとしたためです。人口が増えた農山漁村はほとんどないのです。そして今後五十年間、人口増加が起こることは、ほぼあり得ません。厚生省人口問題研究所の人口動態予測では、二十一世紀初頭からは、日本の総人口ですら急激に減少すると予測されています。

現在、日本の農山漁村の社会的課題は、人口に関わる問題が最も重要です。「過疎化」「高齢化」「少子化」「花嫁不足」など人口動態に関わる諸現象が、農山漁村の存立基盤を取り崩しています。一方、この

現在の課題は、人口を増やすことではなく、人口が減少する中で農山漁村をどう生き

崩す要因をつくったのです。

少子化問題と

女性の意識

特に、少子化問題は今後の地域社会にとって重要です。出生数は昭和二十三年の二六七万人に対し、平成十年は一三万人で、子供の数は半数以下です。そして、子供を産む産まないは男の論理では説明できません。

日本は世界でも最も晩婚化が進んだ国の一つです。この晩婚化は、高学歴化と社会の産業化が原因と考えられます。つまり、豊かな社会が女性の晩婚化と少子化を進めている大きな理由です。裏を返せば、現代の日本は女性にとって子供を産みたい環境ではないのです。

その環境とは、少子化の影響の深刻な農山村においては男女差別や男女の役割の固定化など、生活のあり方そのものが問題となる場合が多いのです。

生きとした地域社会に再生するかが問われているのです。それ故、従来の考え方とは異なる大胆な発想の転換が必要とされています。それには私達の社会が「日本の二十世紀パラダイム（基本的な考え方・枠組み）」から逃れられるかどうかポイントになります。「二十世紀パラダイム」とは、人口の増加が地域の発展や経済の発展に結びつくという「人口増加型思考」のことです。この人口増加を元手に経済を発展させた状況の中で生まれた「地域発展Ⅱ人口増加」というパラダイムは、現代ではもはや通用しません。

人口が増加しない現象は、一九六〇年を境に日本で始まっています。この前後は、日本における「二十世紀型パラダイム」が揺れ動く現象がたて続けに起きています。

第一に過疎・過密、第二に長寿化、第三に少子化です。これらの複合した現象が二十世紀型日本パラダイムを突き

営農の面でも、経営の中心が女性である場合が多いにもかかわらず、認定農業者の女性は非常に少ないです。

女性が家庭内でも楽しくのびのび出来、経営者として自立できるような農村にしなければいけないのです。

若者定住の

ターゲットは三十代

農山村がもつ落ち着きや人間関係の共同性の高さは、本来若い夫婦の定住生活にとって再評価されていい資源です。しかし、二十歳前後の独身の若者にはこの資源の魅力は十分理解できません。三十歳前後の家族持ちになって深く理解できる資源なのです。

多くの自治体は、定住性の低い（都会に目も心も向いている）十八歳人口の若者流出対策が主で、Uターンや定住性向の高い三十歳前後の「大人の若者」に対する定住対策を早く整備す

ることが必要です。

また、二十歳前後の若者と三十歳前後の若者の社会的性格や価値観、行動様式などが異なることを十分に認識して定住政策を行っていく必要もありません。

「じい・ばばエデュケーション」

のすすめ

私の研究室で行ってきた「山村留学」に関する調査からおもしろい結果が出ています。自然認知能力や生活技術の点で、明らかに経験者の方が優っています。また、「将来、どこに住みたいか」という居住地選好の質問に対して、非経験者の二倍以上が農山村に住みたいと答えています。

そういう事実を踏まえて、私は農山村に住む五十〜六十歳代の祖父母が都会にいる孫を育てる「じい（祖父）・ばば（祖母）エデュケーション（教育）」を提唱しています。言い換えれば「祖父母による実家留学計画」です。

具体的には、祖父母が小学

校高学年の孫を一年間以上預かるということ。実の孫を預かるということで、田畑や山林の相続権者でもあるし、じい・ばばにしてみたら、生活の張りにもなるはず。生

見直せ！

家族のタテの絆を

山村留学のように年間を通じて住むことよって、日常の中に自然が入ってくるし、豊かな人間関係も築かれてくるのです。

日本では今まで中央にしか人材を集めるシステムもっていませんでした。それを中央から地方に積極的に戻す可能性が「じい・ばばエデュケーション」のような「鮭の回帰型山村留学」にあります。

高度経済成長以降、三世代にわたる家族関係や親族関係が、企業社会や学校教育によってガタガタにされました。だから、今こそ親族、家族の見直しを通じて、地域を再構築していくことが必要です。

最後に、働き盛りの女性が

今の農山村の原動力となっているわけですから、彼女たちが生き生きと働ける環境をつくらなければいけません。又、女性たちが自分で稼いだお金を遊びに使えるようにすることも、とても大切なことです。自由にお金を使えることはもちろん、仲間づくりや楽しみ事を重視した新たな農村のライフスタイルの創造が必要だと思えます。

女性、じい・ばば、子供がこれからの農山村の主人公です。

キラリ光るまち

京都府大江町

一人一人が大切にされ、
長生きしてよかった町づくりを目指して

大槻 博路



マラソンランナーへのもてなし

「ごめん、みんなでやっちゃってー」、絵画教室を早く切り上げ地元の公民館へ飛んで帰る。部屋に入るとメガネが曇って何も見えない。「実さんが釣ってきた魚や。お前ん所の畑から取ってきた白菜や。」と講釈しながら鍋に放り込んで

くれる。もうみんなは、すでに出来上がっている。「今年も皆さんのお陰で無事、成功裡に終えることができました」と、実行委員長が報告に来てくれ、ビールを入れてくれる。何回目の乾杯になるのだろうか、遅れてくる度に乾杯が繰り返される。年々、参加する女性が増える。夜遅くまで話が弾んだ福知山マラソンランナーを励ます実行委員会の打ち上げだ。

私の住んでいる村は、福知山マラソンの折り返し地点になる。子供達が太鼓で歓迎し有志がボランティアでおにぎりやおしるこを準備する。今年は四千個のおにぎりを作っ

た。シジミの大移動をしたこともある。

トウモロコシづくりが

村への想いを膨らませ

のぼり（不動明王神社）が出てきたのがきっかけに始まった祭りは、休耕田を活用しトウモロコシを栽培するようになった。近くの酪農家から堆肥を運び込み土づくりをする。甘くて、おいしいと注文がくる。収穫されたトウモロコシは町の夏イベントのテント村へ出店し毎年完売する。こんな取り組みをするまでは、「毎日パチンコばかり行っていた主人が、今では仕事が終われば飛んで帰ってきて、みんなと農作業をするようになった。」と奥さんは喜んでいる。作業の後の夢を語りながらのお酒は実においしい。

トウモロコシがみんなの輪を作り、祭りを盛り上げ、村への想いを膨らませ、貯えた売り上げで不動明王神社の祠や社の修復をし、ハッピーを作



トウモロコシの栽培

ったり、墓道の舗装までやってのけた。トウモロコシの裏作で野菜を作り、町の一大イベント酒呑童子祭での野菜市に出店したり、大阪との産直も始めた。

ホタル祭りを楽しむ

ホタルが見たいと始まったホタル祭りは今年で七回目を迎える。マイカーやマイクロボスでやってくる人々は、今では大阪の産直グループだけでなく、口コミで広まり、小さな集落は賑やかになる。

あくまでも参加した人が一人一人自覚的に楽しむ、ジャ



ホテル祭りでのジャンボ流しそうめん

ガイモ掘り、魚釣り、山菜採りを始め、ほうき、かごを作る。竹のお椀と箸を自分で作らなければジャンボ流しソーメンは食べられない。餅つきは何と言っても一番の人気である。日本型グリーンツアーズムと民宿も。

谷間を乱舞するホテルを捕ってきて一斉に放す、天の星に向かつて舞い上がる数千匹のホテルは・・・まさにファンタジー・・・その美しさは、そこに参加した人のみ味わうことのできる感動である。それぞれが無理のないように関わり楽しむ。自分の役割を自覚している。

今出来ることを 一つ一つ積み重ねて

「いずれ私も行く道だから、今出来ることを！」を合言葉に数年前から小地域ネットワーク、福祉ボランティア「さくら会」の活動が始まった。独居老人宅の電話の前には緊急用のメンバー表が貼ってある。月一回の会食会では介護保険の勉強会もした。年二回の小旅行も楽しみである。感謝の気持ち、笑顔、関わる女性達を元気にする。

百歳のお祝いにといただいたお金を基金にし、道路沿いに四季に咲く花木を植え始めた、十年後の村を夢みて！

不燃物収集小屋を作り、壁に絵を貼り付け屋外美術館、飛び出しキケンと鬼のキャラクターを立てる。

最近、耕作できない田畑は増えてきた。グループで管理をしようとして・・・自分の村は自分達で守らないと、住むみんなが力を合わせ・・・時に

は激論、喧嘩もある。だからこそ理解し合い、想いが熱くなる。

自然と人間が共生を考え、実行する時代、今出来ることをみんなが一つ一つ積み重ねて・・・大江の里にはこんなことを取り組んでいる集落やグループが、輝く人々が沢山住んでいる、元気な大江の里を支え、リードしているのはこの人々であろう。

一九五一年町村合併で誕生した大江町は四つの市に囲まれた中山間地の農村である。京都市内から北西へ約百キロ、二時間もあれば京都、大阪へ行ける。酒呑童子など鬼伝説が残る大江山や神社が天下った所と言われる元伊勢天岩戸神社がある。養蚕衰退、鉱山の閉山、度重なる由良川の氾濫は人口六千人を半減した。そんな中、八二年、大江山鬼伝説にちなんだ鬼による町おこしが始まった。

鉄道の開通に合わせ役場、農協、商店を集中させ鬼瓦公



園を作り中心拠点にした。大江山のふもとの「日本の鬼の交流博物館」や宿泊施設「グリーンロッジ」のある酒呑童子の里には、多くの人々が訪れる。そうして昨年九月、由良川をテーマに産業、文化、食、人材育成の拠点としての「あしぎぬ大雲の里」がオープンした。

大江の里のこの間の取り組みは、地域づくりの人材を育て地域経済活性化の条件を作り出した鬼の町をアピールしネットワークを広げた。一人一人の心を大切に、住んでいてよかった、長生きしてよかったと感じられる町づくりが、三つの拠点を軸に新たに動き出した。

無言の教え

宇和島市

楠葉 拓史

北海道・室蘭
チキウ岬沖の海
に、同級生の若
い命が散ってか

ら一年が経つ。彼は航空機の
テストパイロット中に同乗者
と共に消息を絶った。その日
の夜に、ニュースで事故を知
り、それから次々と、私の家
には同級生からの電話がかか
った。彼の安否も判明せぬま
まではあったが、状況がわか
らぬ私にでも、楠葉なら何か
知っているのではと、私を頼
りかつ、友を心配する友人達



の気持ち嬉しくて、涙があ
ふれる夜を過ごした。

次の日、極寒の北の海で彼
は見つかった。墜落した時点
では覚悟していたが、一縷の望
みは我々誰もが持っていた。
昼のニュースで、遺体発見と
いう彼の名がテロップで流れ
ると、私は職場の人目をはば
からずに号泣した。冷たい海
面に浮かびながら救助を待ち
つつ、息絶える彼の無念を思
うと、胸が詰まって言葉が出
てこなかったことを、一年が
経った今でも思い出す。

彼とは、中学・高校時代を
同じ学校で過ごし、大学は違
いながらも同じ東京に進学し
た。
私は、宇和島が好きで故郷

に仕事を決めたが、東京で就
職することも考えはした。今
では好きな土地で、好きな仲
間と、好きな仕事ができるこ
とにずっと感謝している。だ
が、自分の才能では無理だと
はわかっていても、大都会で
日本のため、世界に羽ばたく
でつかい仕事をやりたいとい
う夢も捨て切れなかった。
だから、活躍の場がある大き
な会社に就職した彼らには、
潰えた自分の願いを叶えてほ
しいという思いがあった。

そんな思いを託していた彼
の突然の悲報に、自分の夢が
ひとつ消えたような気がして
ひどく落ち込んだ。だがその
時、ある友人が私に言った。
「彼は自分が望んだ道で命を落
としたのだ。それが彼の生き
方だったのだ」と。その言葉
に私は救われる思いがした。
いや、哀しむだけではなく、
友の死を無駄にせず、自らの
生き方に責任を果たすことが
大切なのだと、その友人は教
えてくれたのだろう。

東京を後にして、もう十二
年の歳月が経つが、今でも東
京に出張すると仲間が集まる。
学生時代の友が私の源流だと
つくづく感じる。そばにいな
くとも、遠い空の下、みんな
頑張っていると思うと、ヤル
気が沸いてくる。それは、私
が会長を務める宇和島市役所
牛鬼保存会の仲間にしても同
じだ。祭りのたびに、額に汗
しながら渾身の気力を振り絞
って牛鬼を担ぐ。その姿を目
の前にして、会長である私は
誰よりも率先して牛鬼保存会
の気概を見せねばと、自分
にカツを入れる。

宇和島の顔ともいべき牛
鬼の、気骨にあふれる伝統を
受け継ぎながら、牛鬼が好き
で、宇和島が好きでしようが
ない愛すべき仲間をずっと大
切にして、明日の宇和島を
我々の手で築きたい。

自分と向き合う場所



その中心となつて活躍しなければならぬのが、現在私が参加し取り組んでいる青年団ではないかと思ひます。

私と青年団との出会いは、二年前の二月頃だったと思ひます。青年団の存在は知っていました。私が、そのネーミングからしてグサイ、田舎臭いといったイメージしか持っていないませんでした。

ある日、職場の先輩に「中華料理食べたいよね」と、断ることもできず、連れて行かれたのが青年団の料理教室でした。その後、訳の分からないうちに、四月、気が付いたら役員として出席してしまつた。

一年目、とにかく行事が多く、スポーツ大会やキャンプなど毎週のように行事が行われ、準備や運営すべてが初めての体験で、結局たいした力にもなれず、とりあえず参加はするという年だったように思ひます。

しかし、この意味のなさそうに一年間に私は大切なものをたくさん得ることが出来ました。中でも一番の宝になつたのは、たくさん仲間と出会えたことでした。学生時代とは違つた幅広い年齢層の方と出会うことによつて、多方面から刺激を受け、視野を広げることができました。また、自分と向き合い、自分の価値を探る機会にもなりました。

二年目、嫌だつたはずの青年団活動なのに一生懸命取り組んでいる自分がいました。団員の減少、後継者不足、青年団のあり方等抱える問題は多々あります。私たちは、本音を出し合い、お互いがぶつかり合いながら、今後どうい

った活動や取り組みを行うか真剣に考えています。青年団活動を通じて、まちづくりや地域社会に参加できる活動を展開していけたらと思ひます。

最近、自分の好きなこと、楽しいことができれば、後は何の興味も示さない、無関心な人が増えてきています。けれど、苦しいことの上で楽しさや喜び、達成感があるので、仲間と一緒にやり遂げたいということに意味があるのではないのでしょうか。

最後に久万町在住の若者のみなさん、ぜひ青年団員となつてください。一緒に感動を分かち合ひましょう。

みなさん、こんにちは。

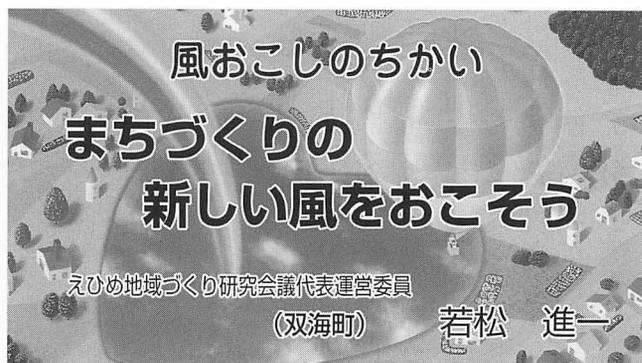
私の住んでいる久万町は、農林業を主要産業とする高原の町です。人口が約七七〇〇人、高齢化率が約三十三%と高く、一方で子供の数が減り、少子化も進んでいます。

そんな中で、町の将来を担うための活力でもある若者の定住対策や、農林業の担い手の育成は、町にとって重要課題ではないかと思ひます。

また、若者のまちづくりへの参加も必要だと思ひます。



リレーで
ちよつ
トーク



愛媛県内の地域づくり事情

私がむらおこしやまちづくりという言葉に出会ったのは、

産業課に席を置いていた昭和五十八年頃だったと記憶している。当時はむらおこし御三家と言われる地酒・特産品・太鼓が過疎対策の主流を占め、特に特産品は砂糖と塩で味付けした饅頭や漬物が殆どであった。昭和六十一年から企画調整室でまちづくりを担当する頃には、まちづくり御三家と言われる人づくり・イベント・シンポジウムへとその方向性が変わり、どの地域も様々な住民運動を展開するようになっていた。その後竹下首相が全国の自治体に一律一億円を交付する「ふるさと創生事業」の時流もあって、まちづくりの波はアツという間にマスコミを巻き込んで全国に広がっていった。

ところが、あれ程まちづくりだ、地域づくりだと騒いだ社会がつい最近になって次第に鳴りを潜め、まちづくりの流れは大きく迂回しはじめている。その原因は色々あるが私流に考えれば大きく分け

て三つに要約される。

その第一歩は何と言ってもハード優先行政のほころびであろう。高度成長の追い風に乘って、住民の意見も聞かぬまま、観光と言う得体の知れない経済性を追い求めて施設を作り、地域活性化の名のもとにソフトもないまま民営と称し第三セクターを立ち上げたが、結果は人も来ず、赤字という大きな荷物が残ってしまった。ハードは本来、ソフトを補完するものでなければならぬが、その殆どはハードだけでソフトは無に等しい事例が多い。

第二は財政の逼迫が考えられる。国を含め全国の自治体の殆どが、民間なら既に倒産しているであろう借金財政を余儀なくされ、身動きがとれないという事実である。その実態はこの外深刻で、最早自治体はない袖どころか、逆さになったも鼻血さえ出ない厳しい状況にある。金の切れ目は

縁の切れ目よろしく人は去り、過疎化は益々進行して合併論議に生き残りをかけようとしてつづある。まちは舞台、まちは劇場と考えるなら、金が無くても知恵を出せばまちは輝くものである。

第三はふるさとのために燃えるような人が育っていないことへの危惧である。その大きな原因は市町村がどんな人を、どのくらい育てたいのかという、明確な方向性が住民



タヤけプラットフォームコンサート

に示されていないからではないだろうか。まちづくりは人づくりと言われるように、百年の大計は人育てが特に重要であることは、日本の歴史が物語っている。

社会に不況感や閉塞感、不透明感が広がる現代社会は明治維新、敗戦、バブル崩壊など、日本がたどってきたかつての社会に似ているともとれるが、エビがその成長過程で確実に毎年一回脱皮することをおえば、地方に住む私達の知恵と創造で脱皮を重ね、私たち自身の住む地方を何とか再生しなければなるまい。その力は、自分のまちだけといった了見の狭い考えでは力も知恵も生まれない。近隣市町村との競争に明け暮れた今日までの戦後五十年を、共生という新しい価値観に変換してこそまちは再生する。

えひめ地域づくり

研究会議の存在

三百人の熱い想いを内子座



めだかの学校での「めだか考」

に結集して昭和六十二年十一月十四日、愛媛の地に生まれた「えひめ地域づくり研究会議」は結成以来十三年目を迎えている。この会議は主に愛媛県内に住む地域づくり人のネットワークと知恵向上、それに各地の地域づくり活動支援を主な申し合わせ事項として自主的に活動してきた。その活動は愛媛県のまちづくり総合センターと提携しながら、地域自立のために大いに役立ってきたと自負している。時流や問題点を的確にとら

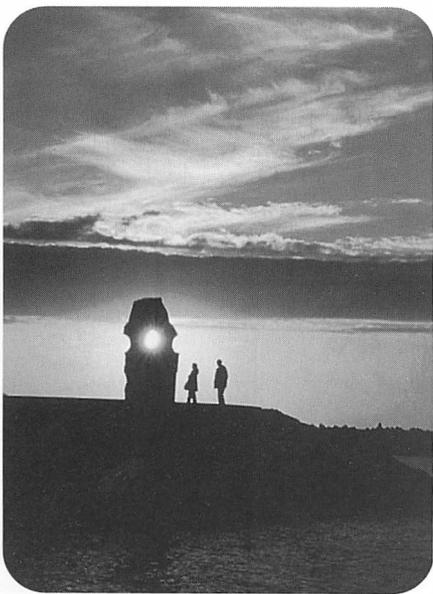
え、各地でゲリラ的に展開しているミニフォーラムは、昨年三崎町名取集落の「青石文化」、双海町東越地区の「めだか」などをテーマに、示唆に富んだ活動を行ってきたし、伊予市の「まち家」、関前村の「高齢化社会」といったミニフォーラムも、運営委員の手で近々開かれる予定である。

研究会議は情報発信の手段として年二回、情報紙「風おこし」を発刊しているが、地ネタと呼ばれる情報を運営委員が中心になって拾い集め、編集発行しており好評を博している。

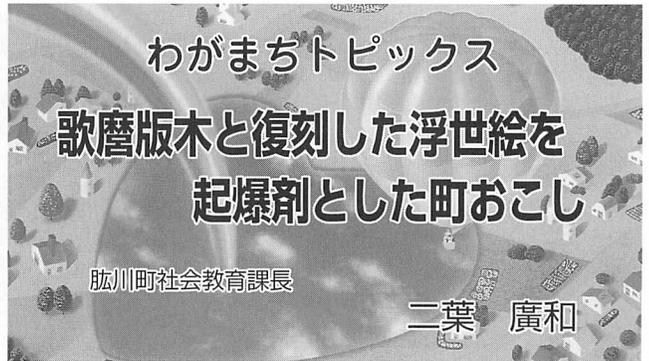
年一回開催している年次総会フォーラムは、今年も「いつまでも安心して暮らせるまちづくりとは」をテーマに、四月から始まる介護保険制度の

裏側に潜む様々な問題について、様々な角度から議論を重ねた。

研究会議発足から今日まで、運営と活動に深くかわってきた私だが、研究会議の存在が自分や「しずむ夕日」が立ちどまる町」双海町のレベルアップに大きく役立ったことは言うまでもない。これからも研究会議の活動を通してグローバルな考えで、ローカルな実践を積み重ね、格上げのまちづくりを目指して行きたい。積極的なあなたの参加を待ちます。



ふたみシーサイド公園にしずむ夕日



はじめに

平成十一年愛媛県下市町村の中でマスコミ登場回数は肱川町が一番であったのではないだろうか。

最近では肱川町を知らない方でも、「歌麿の版木が発見された町」、「版画を復刻した町です」と言えば、「ああ、そうですねか」と分かっていただけることが多くなった。



肱川町がマスコミの注目を集めるようになったのは、江戸時代中期に活躍した浮世絵師、喜多川歌麿の版木が町内から発見されたからである。

まず、はじめに肱川町の概要を説明すると、愛媛県の西部に位置し、松山市から車で約一時間三十分の所にあり、町の中央を一級河川「肱川」が貫流している。人口は約三千二百人、中山間地で、農業が主な産業であり、過疎化・高齢化の町である。

この町で、昨年十月には「全国川サミット」が開催された。

二枚の版木発見の経緯

さて、歌麿版木に話を戻すと、肱川町では昭和五十一年、

町内の方から一枚の版木を寄贈され所蔵していた。

平成七年、浮世絵を独自に調査していた社会教育指導員のバントック京子さんは、「本物の歌麿の版木では」という強い思いから、浮世絵研究の第一人者と言われる、千葉市美術館の浅野秀剛学芸係長に一通の手紙を出した。

このことが歌麿版木の火付けとなった。

浅野学芸係長の調査によると、その版木は歌麿の絶頂期の作品で、三枚続きの右端の版木ではないかということになり、平成十年十月、新聞報道がなされ、それを見た町内の方からも一枚版木があるという連絡が入った。

二枚のお宝発見の気運は高まり、平成十一年三月、浅野学芸係長を招き鑑定を依頼すると、町が所蔵していたものは三枚続きの右端で、新たに見付かったのは、これと同じ左端の版木、いずれも本物に違いないと鑑定を受けた。



右側版木（町所有）



中央版木
（エルヴィエム美術館）



左側版木（個人所有）

その席で、これまで歌麿の版木は、アメリカのボストン美術館に一枚しか存在が確認されていないこと、右端の版画は存在しておらず、左端の版画は、昭和十五年の入札目録には掲載されているが、そ

の後の行方が分かっていない
ことなどが明らかにされた。

また、この三枚続きの真ん
中の版画をアメリカのウイス
コン州にあるエルヴィエム美
術館が所蔵しているというこ
とから、脇川で見付かった二
枚を左右に三枚をつなぎ合わ
せると、九人の女性が座敷で
「狐釣り」の遊びをしている絵
が完成するという事になった。

なぜ、脇川に歌麿の版木が
実在したかは、寄贈者が亡く
なられており実際のところは
分かっていない。

利活用検討委員会の発足

左端の版木は、所有者から
寄託をいただき、二枚の版木
の活用について「歌麿版木利
活用検討委員会」が発足し、
検討されることとなった。社
会教育課を中心に、産業課、
風おこし課、そして、町内で
版画の収集をしている上岡茂
さん、オプザーバーとして大
洲市にある美術館の館長を加

えたメンバーで構成された。

第一回目の会合は、七月六
日にもたれ、三枚続きの版画
を復刻することということが決
定された。しかも、それは十
月十五日から三日間開催され
る「全国川サミット」の前と
いうことである。

限られた時間の中で

たったの三ヶ月である。何
が何やら分からないままの発
進。全国どの市町村を見回し
ても版画を復刻した所もない
ため、自分達がアイデアを出
していくしかない。

また、復刻するためには、
三枚続きの真ん中の版画を所
蔵しているエルヴィエム美術
館の協力無くしてあり得ない。

以前からエルヴィエム美術
館とは交渉を行っていたが、
地道に粘り強く交渉していく
うち、我々の熱意が通じたの
か、美術館から復刻に協力い
ただけることとなった。

しかし、検討委員会の中で
意見の統一が出来ないことが

発生した。復刻する色調を、

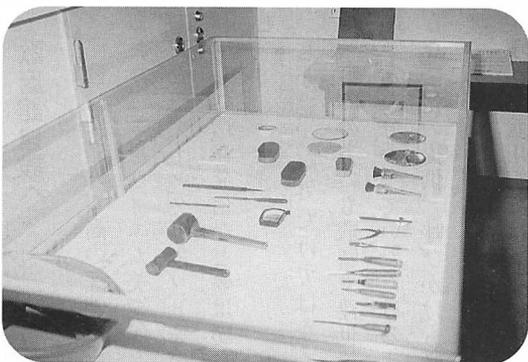
当時の色にするか、二百年経
過した今の色にするかである。

結局、当時のまま復刻する
こととなり、九月にやっと色
が決定した。何とか展示に間
に合う。

しかし、難問が残っていた。
展示である。我々の元にある
のは二枚の版木と、復刻した
三枚続きの版画だけで、本物
の当時の浮世絵など購入でき
る資金もない。



200年ぶりに甦った「狐釣之図」



職人さんの道具も展示

そこで、展示の基本コンセ
プトを次のように考えた。

○他の浮世絵美術館にない脇
川町らしさを出す(版木の
存在をアピール)

○また来てみたいと思っても
らえる展示

○初心者には分かりやすく、
詳しい方にも納得してもら
えるような展示

そして、資料や関連作品の
収集にあらゆる手を尽くした。

また、復刻した版画は三枚
一組七十万円、七十人限定で
販売することが決定した。地

方公共団体がものを売って利益を上げてよいかという問題もあったが、これは財政担当課がクリアしてくれ、版画の販売収益を歌麿の資料収集に充てることとなった。

二百年前の浮世絵が甦る

復刻委託先の方が、「職人さん達のことを書けば一冊の本が出来よ」と苦勞話されていた復刻版画は、二百年の歳月を経てその指折りの職人さん達によって色鮮やかに甦り、「歌麿版画復刻展」として十月



歌麿版画復刻展

七日から一月末まで「風の博物館」で公開した*。

そして、十月十八日、復刻版画の購入者募集の記者発表を行った。

その後、問い合わせの電話が殺到し、事務所内にある三本の電話全てが歌麿の問い合わせ中心になり、電話がつながらないと苦情が出る事態になった。我々が想像していた以上の反響の大きさである。

この募集で二千五百件以上の申込があり、十二月十六日の抽選会で当選者が決定した。そして、当選通知を出し、代金の振り込みを確認した後発送作業を行った。

我々は、もちろん美術品の梱包は初めてで、職員全員冬だというのに汗をかきながらの梱包作業だった。

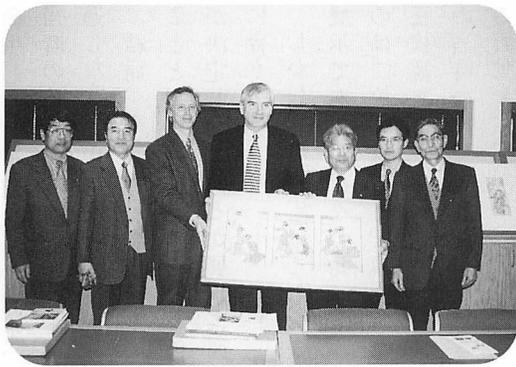
当選者の方から、「届きました。どうもありがとうございます。我々も苦勞のし甲斐があったと職員間で喜んだりもした。」

とは言え、復刻展は先に時

間が設定されたことで、それに間に合わすように全てにおいて後手後手に廻ってしまい、十分なことができなかった部分も反省としてある。

この三ヶ月間の復刻展の入場者は、一万四千七百人を数えた。町の人口の約四、六倍の方が訪れてくださったことになった。

そして、復刻展の後、助役を団長とする五名が、エルヴィエム美術館を訪問し、復刻した浮世絵と町長のメッセージを手渡した。



エルヴィエム美術館にて

歌麿館建設へ

浮世絵は海外で高い評価を得ており、エルヴィエム美術館との交流や、インターネット等を利用した情報発信など夢は膨らむ。

しかし、町外だけではなく、町内の方にも歌麿や浮世絵のことが分かっていただけのような情報の提供、呼びかけも必要である。

現在、肱川町では、平成十三年三月の完成を目標として歌麿館の建設を計画している。

わが町は財政力もあまりなく、大きな美術館のように高価な浮世絵を何枚も購入し、展示することはできないかも知れない。しかし、このすばらしい素材を生かしながら、肱川町に生まれた方たちが、もう一度、いや何度でも足を運びたいまじづくりを目指していきたい。我々の取組は始まったばかりである。

*H12.4.1～5.31まで 第2回復刻展を 風の博物館で開催中。

海水温浴施設

『潮の湯』オープン

弓削町



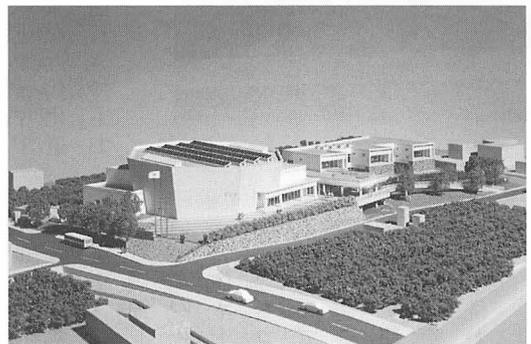
〈営業時間〉午前10時～札止め午後7時半
 〈休館日〉月2回（隔週月曜）
 〈問い合わせ先〉
 弓削町役場企画財政班
 ☎（0897）77-2500

海水温浴施設「潮の湯」は、海水、海藻、海気候等を組み合わせたタラソテラピー（海洋療法）の考え方を取り入れ、日本古来の温浴療法や弓削町独自の入浴法も取り入れ、健康づくりのみならず、遊び感覚で利用できる施設です。保健センター、高浜荘等が併設された健康づくりゾーンに立地し、「運動療法タブ」や浮遊で心身をリラックスできる「洞窟フロートイング風呂」、ミカンや海藻など、四季折々の素材を使った「キャラクター風呂」など、ユニークな温浴が楽しめます。



『中島町総合文化センター』オープン

中島町



〈問い合わせ先〉
 中島町総合文化センター
 ☎（089）997-1181

総合文化センターは、三つの施設からなり、四八九人収容の多目的（交流）ホールは、文化的欲求に高いレベルで対応出来るほか、交流活動の拠点として利用できます。情報・文化センターは、エントランスホール、展示・図書スペース等からなり、郷土出身芸術家の作品展示の他、観光施設や文化財をビジュアルで紹介、インターネットも活用できます。学習型ビオトープは、棚田風の水場をつくり、稲を自然農法で育てるなど、遊びながら学ぶ学習機能があります。



“MY TOWN,”らおっちゃんく”

歩キ目デス&足ラテス

第11弾



岡崎 直司

レクイエム “銭湯” 「保内町 清水湯」

今回は、銭湯について、チト考えてみたい。

かつて、ベトナム戦争の頃だったか、戦争を知らない子供たち”というフォークソングが流行ったことがあった。現代は、銭湯を知らない子供たち”の世代。どこの家にな



銭湯文化研究家・町田忍氏の番台講座

って内風呂が完備している訳だから、子供が銭湯を知らないのは当たり前。トーゼン商売としての銭湯は斜陽産業となつて久しく、現在、地方では特にその件数が激減中である。

今また、愛すべきそうした中の一つが消え失せようとしている。その名は清水湯。この号が出る頃には跡形も無くなっているかも知れない。

保内町の清水町にこのお風呂屋さんが登場したのは昭和十一年のこと。その年は二・

二六事件なんかがあったりして、大分キナ臭い時代に突入し始めた頃だったが、武内木鐵工場で使用されていたボイラー釜を転用して営業が始まった。

従って、この蒸気ボイラー釜は、以来昨年休業するまでの六十三年間を働き続けたこととなる。しかも木鐵工場の期間を加えると、大正か明治期の釜が現役で稼働していたとも考えられ、コリヤ凄いい。ひよつとして県内最古のボイラー釜。立派な近代化遺産として即博物館行きでもおかしくは無い。



極めつけのレトロつい立て

さて、清水湯と言えば煉瓦煙突。界限でランドマークとなっている、この丸煙突も開業時に築かれている。煉瓦はどこから調達されたのか、また元と末で直径の違う円型をどう調節しながら積み上げていったのか、ナゾは尽きない。

大体ネーミングが素直でいい。今もコンコンと清水が近くで湧いており、ゆえに清水町、そして清水湯。勿論その湧き水が使われている。もうそれだけで綺麗さっぱり、身も心も洗われるようではないか。

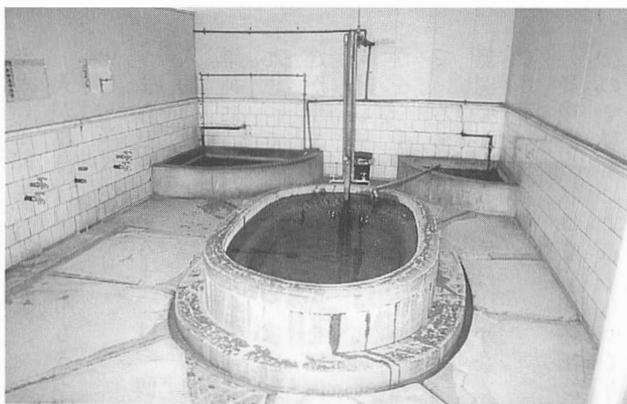


昭和11年開業の清水湯

そして、他にも面白いことがいくつか。まず、番台が減茶苦茶低い。以前、地元のみちづくりグループ「保内大学」主催で銭湯文化研究家の町田忍氏をお迎えし、講演会を企画したことがあった。全国初、番台講座である。氏曰く、「全国の銭湯を一千軒以上制覇したが、ここ清水湯の番台は日本一低い！」と。そう云えば、

関東方面の銭湯はどこも番台が高い。その番台に座り、男湯女湯の脱衣場に分かれて座る受講メンバーに、聴く方は楽しんだが、右、左、とても話しづらかったと後日談。

一方、浴室はというと、洗い出しと研ぎ出しによる左官仕上げで、中央にだ円の大きな浴槽があり、隅に二つ。その小浴槽の一つが、清水湯名



入浴客は居なくとも“女湯”の方

物懐かしの電気湯である。私は苦手だったが、通にはたまらない、知る人ぞ知るあの電流の快感。つまり、浴槽内に銅板を張って弱電を流すのである。当然、足でも手でもお湯につけるなりビリビリくる。これが、肩こりや腰痛、関節炎などに効くらしい。十〜十五分、長めにつかる為、湯温はぬる目しておくのだそう

な。「おつちゃん、もうチョイ電圧上げてや。」とのたまう剛の者もいたりする。

ともかくナンダカンダ、地域に愛され続けて六十有余年、これまで頑張って経営されて来られた三代目の中岡保さん、長い間本当にご苦労様でアリマシタ。



▶ 蒸気ボイラーの金たき風景

(注) 愛媛県内の銭湯は104ヶ所 (H11.6.1現在平成11年度浴場助成制度調)



— 研究員卒業レポート —

研究員活動を振り返って

愛媛県信連 小川 龍児



して得る事の出来ない、刺激的な七三一日間でありました。

特に素晴らしい事は、農業団体の職員である私にとって、まちセンに籍を置く機会がなかったら、恐らく一生涯お会いする事がなかったであろう、多くの素晴らしい方々に接する機会を得た事であります。

全国的に著名なまちづくりの先駆者・指導者・地域のリーダー達は、其れ其れに強力なネットワークの持主でした。

思えば二年前、まちセンに勤務する事になった時は、正直一体何をする組織・団体なのだろうかというのが本音でした。

当初、カルチャーショックを受けたのが広島県総領町で開催される、過疎を逆手とする会主催の「逆手塾」でした。

ここには毎年全国から、まちづくり人が参集します。その老若男女、年齢も住む所も違う「まちづくり人」の面の、何とエネルギーッシュでパワー溢れることか...

こんな人々が全国各地に居られる事に感動を覚えました。

皆さん、其れ其れに地元を愛し、その地域が「とつても大好き人間」で、地元にしつかりと根を張って地域を見つけておられます。お金が無くてもしつかりとアイデアでカバーしています。

皆さん、各々住んでおられる地域も環境も違いますが、其れ其れに個性溢れる住みよいまちづくりを目指されてることに感銘を受けました。

人が輝けば、その町もきっと輝いてくる筈です。

まちセンに来るまでは、個人的には「まちづくり」等は単純に「お役所のする仕事」と思っていた訳ですが、自分達が生まれ育った故郷を如何に子供達に、残し伝えてゆかを一生命真剣に取り組んでいる多くの人々に出会い、無関心という訳にはいかなかった。

最後に、私は農業団体出身なので農業によるまちづくり

についての所感を述べたいと思います。

現在、農業においては生産技術面は高度に発達しておりますが、一方の消費を作り出すというマーケティングの研究については遅れているように感じます。

農業によるまちづくりには、その生産と生活の場としての農村の活性化も同時に必要な事と考えてゆかなければならないと思います。

即ち、顧客の満足と住民の満足を追求した快適・貢献・効率・高収益のキーワードを満足させる戦略、戦術が必要であると思うのですが...

最後にまちセンでお世話になった渡部所長*や研究員の方々、えひめ地域づくり研究会他、まちづくり関係者の皆様に誌面を借りまして御礼申し上げます。

*（前）愛媛県まちづくり総合センターが平成12年3月31日で解散したことに伴い、渡部正人所長は、同日付で退任されました。



— 研究員卒業レポート — スタート地点へ戻って

弓削町 檜垣 明宏



今思えばまちセンでの研修は、戸惑いの中で終わってしまったように思います。そしてこれから実際に「現場」でまちづくりに関わっていく訳ですが、正直、混乱しています。

二年間で本当に多くのことを学ばせていただいたのですが、あまりにも多くの事を頭に詰め込んできたため、まだ整理ができてなく、何をどうしていけばいいのかが見えていないからです。

しかし、まちセンでは、実際に現場で活躍している多くの人にお会いし、時には酒を酌み交わしながら語り合い、「本物」を学んできたので、私自身も実際に現場に関わっていくうちに、少しずつ何かが見え、整理していけるのではないかと、自分自身に期待しているところです。勿論、「まちづくり」というものに明確な答えというものはありませんが、生の体験が活かされるものと信じています。

パワー漲る人達

派遣一年目に、「えひめ地域づくり研究会」の事務局を担当しました。この団体は、「超強力個性派実践集団」とでも言いましょうか、各々が

強烈に個性的な実践者なのです。このような人達が集まった団体ですから、私も初めはかなり威圧されると同時に、「大人しい愛媛にもこんな人達がいるのか」と、ショックを受けました。

しかし、学ばせていただくことばかりでした。愛する地域に根を張り活動しながら（ローカルに生きる）、愛媛にとどまらず広い視野で物事を捉えていく（グローバルに考える）という、その常に前向きな姿は、私のまちづくり活動の理想としていきたいと思えました。

やっとスタート地点に

二年間毎日、新聞に掲載されている市町村のまちづくり記事を切り抜きしていましたが、季節毎に掲載されるイベント等の記事は、ほぼ同じような市町村ばかりだったように思います。

これはやはり外から見て、「魅力あるまち」として在り

続けているからだと思っています。新採でまちセンに行っていた私にとっては、弓削町に戻り、ようやくスタート地点に立つことができました。

まちセンで吸収したことを、一住民として、出来るときに出来ることから、楽しくまちづくり活動をしていけたらと思います。住民がまちの魅力を認識し誇りを持ち、楽しく暮らしていけるまちづくりが出来ていけば、外からも「魅力あるまち」として認識されるようになるのではないかと思っています。

そしてその一報が、お世話になった方々の目や耳に届いた時に、初めて恩返しができるように思います。

まだまだ未熟者の私ですが、「一生懸命」という言葉だけでは忘れず、まちセンで培ったネットワークと若さを生かしたフットワークで、汗をかきながら頑張っていきたいと思えます。



— 研究員卒業レポート — 明るく生き生きとした 地域を目指して

肱川町 沖田 敏広



まちづくり総合センターに派遣が決まった頃、私は地元
の公民館主事をしていて、そ
の活動を通じて地域づくりと
いうものに興味を感じていた
頃であった。

このようなこともあり、い

い時期にここで研修させてい
ただいたと思う。

地元を離れ、便利で自由な
生活を送りながら、いろいろ
な地域を見ることで自分自身
はどう変わるだろうかと思っ
ていたが、やはり地域への想
いは変わることなく強かった。

さて、私にとってここでの
経験は一年という短いもので
あったが、いろいろな町に出
かけ、数多くの人に出会うこ
とができた。

全国レベルで名の知れた人
との出会いに感激し、身近に
も素晴らしい活動者が数多く
いることも知らなかった自分
に反省しながら、人や地域に
触れ、刺激を受ける毎日だっ
た。

先進地と言われる町や村で
は、人々に話を聞き、時には
交流という名のもとに、酒を
交えて本音で語ることで、よ
り人と地域が見えてくること
も多かったように思う。

どのまちづくり人も、自分
のまちを愛し、良くしたいと

いう強い情熱で地域を引っ張
り、身近な人にも刺激や影響
を与えている。

また、交流も盛んで、外か
らの発想を上手く取り入れな
がら、地域にとって何が必要
で、それが住む人にとって最
も利益あることなのかをよく
見極めた、地域らしさのスタ
イルでの活動が個性を引き立
たせ活性化させている。

人がまちを築き、輝かせて
いることを改めて感じた。

私はここ二、三年、地域に
対して夢と希望を持つようにな
ってきた。

たとえ、過疎・高齢化の先
進地だと言われる地域であつ
ても、そこに住んでる人々が、
明るく生き生きと暮らせる地
域をつくりたい。

過疎・高齢化が進む中の合
併論争など、不安や危機感も
感じているが、豊かな自然の
中、素朴な人情味にあふれ、
お互い様に助け合う風土は、
財産であると思うし、魅力的
な地域づくりへの可能性を感

じている。

そのためにも、地域にとつ
て必要なことを助け合い、楽
しみながらやっていける環境
など、活動が身近で魅力的で
なければいけないと思うし、
若者や女性の意識の掘り起こ
しや地域への愛着を生むこと、
よりよい人間関係をつくるこ
とが出来ればと思う。

とにかく、どうせやるなら
楽しもう、地域を良くしよう
という気持ちで大事にしたい。

特に過疎化が進む地域であ
ればあるほど、地域の中で個
人の果たす役割は大きい。し
たがって一人でも多くの人が
楽しく生き生きと暮らすこと
が出来れば、地域は輝いてく
るのではないだろうか。

今後、まちセンでの経験を
生かして、より広い視野で情
報を得ながら、知り合った
人々とのふれあいを大切に、
地域を愛し、あせらずじっく
り取り組んでいきたいと思う。

舞たうん

読者の声

こえ

毎号『舞たうん』をお送りいただきありがとうございます。ご感想が「まちづくり」について感じる人が多いこの頃ですが、全体的に「フォーラム」という仕組みを陳腐化させた何かがあったように思います。

一つは規模を拡大して「お祭り」にしてしまったことです。何百人の人を集めて「フォーラム」を開いて、郷土料理を食べ泊まる、この中から新しい思想を掴み取ることが出切るでしょうか…。イベントは「イ」内側、「ベント」外側（ペンチレーターと同じです）疑問や悩みを持つている人が集まって、自らの内なる物を吹き出さね

ば駄目です。それには規模で勝負をしたら良い企画にはなりません。

二つ目は各地の事例を聞いても、それを自分が担当している案件に「ブレイクダウンする技術がない」ので、せっかくの話も「あの人だから出来た」と、限定してしまい、普遍化をしないことです。

三つ目は「現在の技術の延長線上に、地球の未来は無い」ことに、気がついていないことです。これは難しいことなのですが、これに気づき具体的にどのような事かが理解できないと、現在の大きな命題には残念ながら対応できません。また、このような大きな思想は、「フォーラム」のような場では出にくいのです。残念ながら百の講演を聴いてもダメな物はダメなのです。

四つ目はいろいろな機会や情報は氾濫していますが、大切な事は、①現在、大切な情報はどれか読み取る目を持つこと。②読み取れなければ、あの人は大丈夫と思える人を探し出すこと。③そして「情報を持つている人をたずねる」

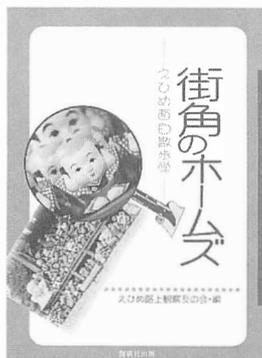
直接聞くことです。民俗学を拓いた柳田国男は近世が生んだ代表的旅人です。彼が「旅の学問は、人の顔、何でも無い物腰、物言いなどが本に書いてないから、自分で行って経験しなければならぬ。」と言っています。博学の彼をして「旅」を生涯の友にしたのですから、皆さんも「国の光」を掴み取るような旅が必要だと思います。

「まちづくり」の入門としてのフォーラムは続けましょう。でも、もう一つの目も忘れないように…。

商店街の仕事をしていた時に、よく「商人が自宅を郊外へ作って町へ通うようになった時から中心市街地はダメになった」との論議がありました。これは正しいのですが、これで商人を攻めても大きな命題の解決にはつながりにくいのが現状です。結局「個人が個人のベストを選択すると、地域がだめになる」この問題にたどり着くと思います。皆さんいかがでしょうか…。

（長野県飯田市 高橋寛治）
Email: kanji@avis.ne.jp

Information



岡崎直司さんや柳原あや子さんが編集された「街角のホームズ」が発行されました。

みどり清流 白壁と古墳の町
第10回 小さな美術館めぐり
筑後吉井町
平成11年度 福岡県文化賞(交流部門)受賞
2000年5月3日(水)～5月5日(金) (午前10時～午後5時)

「美と心のふれあい」をテーマに、清流と白壁土蔵の町並みや農村景観を背景に30力所の小さな美術館を設置し、地元作家の力作や、コレクション等を展示しています。

「言葉のキャッチボール」を合い言葉にご来町をお待ち申し上げます。

主催 筑後吉井の小さな美術館めぐり実行委員会
事務局 〒839-1312 福岡県浮羽郡吉井町大字清瀬557-2 山崎昇三宅 ☎09437-5-4100 (自宅) (吉井町後場町おこし課 ☎09437-5-3111)

福岡県吉井町の山崎昇三さんから「小さな美術館めぐり」のご案内が届きました。

御風社出版 定価一五〇〇円(税別)

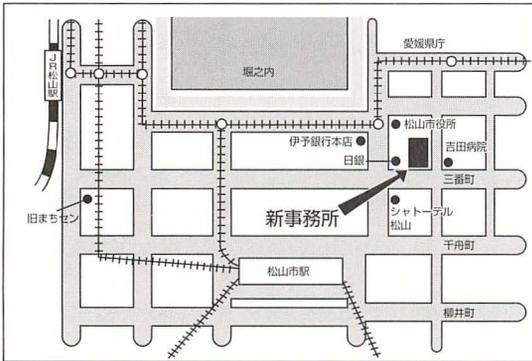
2000.4.1 “まちセン”は、

(財)えひめ地域政策研究センター まちづくり活動部門として 新たなスタートをきることになりました。

■新財団のオールスタッフ



三好 誠子 (三瓶町)
森田 浩二 (津島町)
橋岡 勝一 (県農えひめ)
藤田 享 (愛媛県)
〈まちづくり活動部門〉
三神 雅幸 (NTT)
黒河 勝久 (愛媛銀行)
俊野 忠彦 (愛媛県)
高橋 英雄 (県信連)
村上 良太 (四国電力)
矢野 元浩 (伊予銀行)
〈企画研究部門〉
事務職員
西村 寛子
専務・所長
三木 秀文
常務・統括部長
茂木愛一郎
(日本政策投資銀行)



松山市三番町4丁目10-1 愛媛県三番町ビル2階

■事務所も変わりました。

駐車場がほとんどないので、大変ご迷惑をおかけしますが、松山市役所前地下駐車場が一番近くて便利かと思います。

■事業は、従来のまちセンの事業をそのまま継承するとともに、新たに地域づくりリーダー育成研修会等の委託事業なども行います。

春は異動の季節ですが、今回ただ一人の残留者になってしまいました。

これまでの「まちセン」のいい部分を受け継ぎ、大きな組織の中で埋没することのないよう頑張っていきたいと考えていますので、よろしくお願ひします。

なお、今号の編集は、舩川町に戻った沖田さんがほとんどやってくれていたものです。



内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』編集係までお寄せください。

〒790-0003

松山市三番町四丁目十番地一

愛媛県三番町ビル二階

(財)えひめ地域政策研究センター

まちづくり活動部門

(まちづくりセンターえひめ)

TEL089 (932) 7750

FAX089 (932) 7760

発行/平成十二年四月十二日

(財)えひめ地域政策

研究センター

印刷/三創印刷株式会社